おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和４(2022)年
11月号
通巻627号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和４年11月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

天理柳本、崇神天皇陵より二上山遠望　　奈良市　和田保さん撮影（文　林修三・８頁）

生母さんが語る

法主さんの子供時代、学生時代

――昭和42(1967)年の録音より

生母さんとは、法主のお母さんです。生母さんのお話を聞いた時の録音が残っており（質問者はあるいは平谷照子さんかも）、そこから法主さんの子供時代、学生時代の思い出をまとめてみました。昔のままの奈良ことばは今では貴重でしょうが、聞き取るのも少し難しかったし、ここでは読みやすいように整理をしています。

挿入している解説文やカッコ内の補足は、野草社刊『ながそねの息吹』中の「一大事の因縁」と「わが半生を語る」を参考にしています。（編集部）

父子二代、宿命の〝しるし〟

――生母さんは本名フジヱ、法主の父・矢追隆蔵の嫁として矢追家の人となる。幼少時より霊能力に優れ、「一大事の因縁」の様々な出来事において、主要な役割りを担った。ここでお義母さんと言っているのは、やはり霊能力のあった法主の祖母キシ（写真）のことで、フジヱとの絆は強かった。――

生母さん　あの子ができた時分にな、私にしたら男の子は初めてやったけど、胸が動いてきまんねん。お義母さんがいつも「やっぱりな。ああ、この子がな」て言うてはった。

主人は新宅で初めて生まれた子でして

んけど、やっぱり胸が引っ込んで動きましてん。主人の上の兄さん（安太郎）は本宅で生まれてますねんな。

――安太郎は神童と言われるほどの人だったらしいが、現役入隊中の事故で他界。次男の隆蔵は商売が好きで大阪で奉公をしていたが、新宅すなわち現在の大倭神宮にあった神屋敷に連れ戻されて、嫁さがしも始まりフジヱとの縁談が決まって、隆家（法主）が生まれることになる。――

生母さん　その兄さんが「今度わしは、コボン（＝小さいボンボン）の長男に生まれる」と言わはったもんやさかい、お義母さんにしたら、もうその子はきっと自分の子（安太郎）やとばっかり思うてはるでしょ。そやさかい、私がちょっと言うても、「そんなこと言わんといておくなはれ！」言うてからな、怒らはりますねん。

――隆蔵は生まれて間もなく胸部が大きく波打って、漏斗状に窪んできた。キシがお伺いをたてると、「この神屋敷を護り世に顕わす宿命の〝しるし〟であるから案ずるには及ばない」という御神意であった。父隆蔵と同じく長男の隆家の胸部に、その〝しるし〟がつけられていたのである。――

生母さん　あの子は小さい時分から、研究しいでな。時計であろうが何でも砕かはるねん。そいで仕事せわしいもんじゃから、私が「もう砕いたんか、お前は損坊主の阿保坊主や」言うて怒ってましてん（笑）。そしたらお義母さんが「今はこんなんやけど、この子は大きいなったら見ててみぃ」言うてからな、「もうな、小さい間はな、気があかんねん」とよう言わはりました。

「蔵へ入れるっ」と言いますやろ。ほんならすぐに「すいません」言うて謝りまんねん。ええ根性（素直の意か？）してんな思たら、またすぐ砕いてますねん（笑）。「ほんまに損坊主や」言うて私は怒ったんですけどな、お義母さんが「いやいや、この子はそんなんと違うねん」とそう言うてな。

今度、学校へ行くようになりましたわな。そこらへんの子らと一緒に行きますねん。そうしたら書いたりすることは何でもよう出来まんねん。それにな、「本読め」言わはったら、お辞儀しますねんて。整理することや考えることはなんぼでも出来るんやて。せやけど、口で言えと言わはると、これ恥ずかしいねんやろ。「また今日も、ボンちゃんお辞儀しはりましてんで」て、私に言うてきまんねん。なんぼ知ってたかて、やっぱり読まなんだら疑われるだけ損ですわ。もう私は「阿保や」しか出てきぃへん。お義母さんが怒らはるしな、まあまあ「そうか」言うてたんですけど。

お義母さんはな、「これでよう分かった。わしのボン（安太郎）もそうやったんや」、ほんで「十二、三になるまで見てておくれやす。阿保やなんて言わんといておくれ」言わはった。

そうしたら段々でんな、五年生、六年生くらいになってきたら一番になりますねん。書いたらこの子は分かってるからと、読まんさかい、もう先生が指しはらしませんねん。

中学校受験

ところがですな、中学校受験の時、四条畷へ受けに行ったもんは、みんなあかなんだて諦めはるねんけど、あの子だけ学科はよう出来てんのに、体格がね、胸が引っ込んでるさかいあかんかった。

今度、郡中（県立郡山中学）を受けに行く時、それを気にしてまっしゃろ。試験の発表を自分で見てくる言うたんやけど、またあかなんだらあかんし、「ちょっと待ち。お父さん見に行くわ」て主人も出掛けましてんけど、怒って帰ってきましてん。一緒に受けに行って、あかん子でも通ってはんのに、あきまへんねん、あの子がベタ（＝ビリ）。「もうカタワにしてしもた」と、ほんまに癇癪おこしてたんです。

それを聞いて、（法主の家が西の矢追だったのに対し）東の矢追が先生に出てましたんで、校長先生に「こら、どないかせないかんわ」言うて、その日ちょうど（布施の）日新商業がもう午後二時に締め切りでしてん。校長先生な、学校（郡中）へ行かはったんだす。聞いてみたら「これはちょっと訳があんねん」言わはるねんて。ほんまは見せられんそうやけど、学科は通ってまんねんて。それにな、△印になったる。なんぼ学科がよう出来たかて、体格がこれではいつ死んでもおかしくない。そんなん取らんかて、通る者がぎょうさんある、というような話やねんて。

校長はんは、「矢追君、走ってくれ」いうことで二十分前に（日新商業に）入ったんですて。判が要る時、同じ矢追やから自分の判を押しといた言うてね。そこへぶつけてくれて、試験には矢追先生と二人、主人もついて行かはったんです。

（校医の）大阪の薄病院の薄恕一先生に、我が胸を開けて、「わしもこの通り。ええとこは似んものやなあ。わしはこんだけ生きてんねんさかい」て、言わはってんて。

診察しはったら、「校長！　体格は乙にしとこ。学科は知らんぞ」言わはって、学科は十九番かなんかで通りました。そのお陰で中等学校に入れましてん。

大学受験

▲左から法主・隆家（大学予科３年）、弟・隆盛（小２）、妹・彪子（あやこ、女学校４年の夏死亡）、弟・隆義（小３）

あこにちょうど四年行って、まだ歳いきまへんのになあ、十八の時か、東京に行きました。私も本人もあんまり構ってなかったんで、妹がな、「姉さん、あんまり可哀想やないか」言うて、久留米絣の上下こしらえたってくれましてん。それに家にあった袴と帽子着て行きましてん。

ちょうど家を出る時に、親戚の人（関係不詳）が来て「ボン、どこ行くねん」て尋ねはるねん。「東京へ試験受けに行く」言うと、「やめとけ、やめとけ。オジさんはのう、郡中で一番やったんやぞ。それに高校受けに行ってすべったんじゃ。お前ら商業の四年から行って何になるもんか」、こない言わはった。その親戚が嫁さんや自分のやや子連れて来てましたから、私は「一人で行きや」言うて送りませんでした。

それまで旅行も年にいっぺんも行かしません。東京に行く時初めて、旅行に行ったと思って旅費だけくれ言いました。着ていくもんは、猿股も襦袢もちゃんと洗うて直してあるて、自分ながらに心掛けて用意してまんねんなあ。私は毎日、大阪に出てますやろ。買うてやろ思いましたけど、買わんといてくれ言いますねん。

――隆蔵は神屋敷で現罰に苦しんだ過去を水に流し、神慮に絶対帰順して神仕えをする心に変わった。その頃、嘆願されてフジヱが加持祈祷したところ村の子供の病気が全快したり、思いもよらず雨乞いまで頼まれて雨が降った。評判が広がり世間に対し問題もあったので、フジヱは正式に加持祈祷の免許を取り、大阪に出張所も設けることになった。隆蔵は、法華経の行者としてのフジヱに仕えなければならない、これが共に修行することだと悟っていた。――

▲父・矢追隆蔵

▲矢追日妙師(生母さん)と、その書かれたお題目
紫陽花邑でも病気や怪我の時は、よく生母さんのお世話になった。

◀昭和６年春、学部１年度入学、21歳の法主

生母さん　先に（早目に？）東京に行って学校も見に行ったらしい。主人のいとこが、銀座とかなんか知らん、わたなべいう本屋だんねん。年賀状か暑中見舞くらいな交際でしたやろ。主人がその葉書持たして、手紙だけ出しといてくれはったんだっしゃろ。

（夕方か？）みな戸が閉まって屋号ばっかり書いてまんねて。ずーっと一軒一軒見ていったら、一軒ほっと戸が開いたんですて。そうしたらおばあさんが、「あっ、大和のボンとちがうか」、こない言わはってんて。「はい」言うて立ち止まったら、「やあ、コボンによう似たはるわ」、主人のことコボンて言うてはるねん。主人のお父さん（法主の祖母キシの夫で、養子・豊太郎）の兄さんの嫁さんが、我が息子の家に居てはったらしおますわ。東京のそんなとこで、初めて戸開いたら、そこやったやなんて、まあないことだっせ。芝居かなんかみたいな。

「さあお入り」て、そこで泊めてもろて試験に行ったらしいです。商業の四年から行って、どんなふうであれ、うまいこと入れたわけですわ。

大学時代

私が法華経やから、「法華経でいくで」言うてな（立正大学に進学）。夏休みに帰ってきて七日の断食したんだすがな。一日にコップの水、ちょっと飲むだけで。

学校に行ってる時分の話は、私が外に出ているもんやから、いろいろはよう聞かんけども、いっぺん聞いたことやねん。帰る時に駅でみな寄って

汽車に乗り込みますやろ。もう馬鹿な話ばかりするんですって。そうしたら涙こぼれますねんて。苦しんで学費送ってる親もあるやろに、一生懸命学問せんとこんなんやと思たら、親に申し訳ないと、もう胸が詰まりますねんて。

そやから今度から帰る時にはそっちへ行かんと、おじいさんやらおばあさんの側に座りますねんて。氷上さん（下宿先）が、仰山持たしてくれはった果物やとかお寿司やとかパンとか、これおあがり言うてぽつぽつ出すと、みな喜んで食べてな、孫にもろてええですか言うたり。それを見てるほど愉快なことはない言うんです。

十六時間乗って帰るから、家に着いたらすっかり無くなってます。お金使いなと言うてるんやないけど、急行には乗らしませんねん。

私が大阪から氷上さんに毎月何やかや送りまんねん。けど、パッと開けたら我が受け取らんと、「あ、オバサン来ましたよ」と奥さんに渡してしまう。そやから帰る時には必ずお土産を持たせてきはりますねん。そこの女の子が買うてきた物を、

▲法主（後列右）が学生時代に一緒に下宿していた久保常晴さん（後列左、共に考古学専攻）と家主の氷上一家との卒業記念写真
（昭和９年３月25日）

「あんちゃん、お分けしましょう」て半分ずつくれはんねんと言うてたこともありました。

お金かてようけ送ったら貯金しますねん。とにかく電車にも乗らんと歩いて、橋詰のお乞食さんに十銭やりますねんて。たいてい五厘しかもらわれへんから喜びますやろ。それ見てるほど愉快なことはないんですて。

制服着て靴はくのは教練の日だけや言うて、間は安売りの草履やズボン買うて、学生服六年買わしませんねん。私は大丸で買うてね、襦袢でも猿股でも靴下でも、半ダースぐらい送りますねん。それにな、苦学する人にやってしまいますねんて。

六年間経って卒業して、お父さんが迎えに行きましてん。その時、氷上さんの奥さんがいろいろ言わはるのを聞いて帰ったんです。靴下でも自分でとことん生地当てて繕うんですて（笑）。六年間でたった一足ほかしただけらしい。

（家計簿のことか？）ちゃんと帳面に綴ってね。奥さんにも「オバサンを見てたらだいぶ金遣いが荒い。食費・雑費・医療とか書いてあるから、ここに書きなさい。自分で考えながら遣り繰りしたらいい」言うて、帳面渡しますねんて。

ご主人は晩に酒飲んで、奥さんに「こんなもん食べられるか！」「下宿代もろてんのに粗末なもん食べさして」て怒らはりまんねんて。そうしたらあの子がな、「オバサンは、どうしたら美味しかろうと精一杯骨折って拵えたはる。辛かったら水をかけて食べたらよろしい。薄かった醤油かけたらよろしい。ご飯がこわい時は焼き飯にもなるし、柔らかい時は胃によかろうと思って食べたらええ。食べ物で小言言うような程度では成功の見込みはない」と言いまんねんて（笑）。それからご主人も言わんようにならはったて。

それにな、「オジサンの月給が百円だとしたら、小さい子が二人いはるから、十円ずつ二十円を貯金しなはれ」「三、四日ほどでも月給が無いようになった時にはな、わしは塩でもかけて頂きます、貯金を出したらあきませんで」、こない言うたって（笑）。向こうの奥さんが、「矢追さんほどの人は滅多にない。ほんまに神さんみたいな人や」と言うたて。

それにな、三月散髪せえへん。帰って来たら「早う散髪行ってき」言うてな。

弟がまだ小学校行くか行かんかの時分に、何たらいう雑誌かな、歴史の本を送ってきますねん。五十銭と書いてましたわ。私が何気なしに「絵本やったらとにかく、まだ難しいやろ」言うたんです。ほたら「月に五十銭ずつの散髪をする思って、あの本を買うて送る。決して無駄な金は使ってません」こう言いまんのや（笑）。またあの子は早うから、あんなん読みましてん。

妊娠した時のこと

上の子がまだ小さいのに年子でまた下にできるから可哀想に思てましてん。十人の大勢の家内で忙しいところへ遠慮せんならんような気持にもなり、いろいろあったやろと思いますけど、その時代のことは忘れてしもて、後であれがやっぱり聖徳太子やったんかいなあという感じがしてましたけどな。

お腹が大きい時分に夢やうつつにでも聖徳太子がしょっちゅう見えたり、そそっと懐に入ってきはるんです。そんなことあったのは、よう覚えてますわ。わりに幼い姿で見えますねん。その時は別に気にしてしませんでしたけどなあ。やっぱり小そうなって私のお腹に入るのんかいなと思てました。

（文責・編集部）

「神通力如是（じんずうりきにょぜ）」の真意をさぐる　第二十二回

大倭教の源流にさかのぼって

今回の神語りの中で中将姫が語る内容は、前回の姫の語りとかなりの部分重複していますが、それだけにその思いの強さが印象的です。今回の註釈では、奇稲田姫が法主に語る陵墓確定の件も含めて、多少踏み込んで深読みしてみることにしました。読者の皆さまも共に考えてみて下さればといわいです。

原文

十一月十七日、午後八時の続き

「吾ハ、奇稲田姫。

日聖ヨ、ヨク承ハレ、陵墓①ノ確定ハアンズル事ナカレ。吾レ親ラ申サン、安心イタセ。吾レ世ニ出ル時トモニ埋モレ玉ヘル天皇（スメラミマ）トモニ世ニ出デン。安心イタセ、アンズル事ナカレ。倭姫日日御苦労デアル」

「拙キワザニテ日日オン前ケガシ候シニ有難キオン言葉倭姫有難クチヨザイ致シマス。オイトマツカマツリマス（両手ヲツキ）ル」

「吾レハ、中将姫。

八百萬余ノ神等、吾ガ罪障ヲヌグイ玉ヒ、母ノオカセル罪、何卒オ許シ下サイマセ（礼）。母ノ罪ハ吾レアレバコソ、母ノ罪ハ吾レノ罪、トモニ題目トナヘ、トモニ罪障ヌグヒ申サン。母上、キコエマシタカ。母上、一日モ早ク罪障消滅デキタナラ、吾等倖デアル故、真②ノ題目唱ヘ吾レモトモニ行ヲナサン。母上ヨ聞エマセヌカ。父上、君モトモニ罪アル身、共ニ題目トナヘ罪障消滅セラレヨ。妹ヨ、汝モソノ中ニマジル、共ニ罪障消滅セラレヨ。黄泉国③（ヨミノクニ）ニ居マセル母上、ナニトド母ヲスクイ玉ヘ。姫フビントオボシメサバ母ノ御心ナホシ玉ヘ。吾レ題目トナヘン母ノ為、父ノ為、妹ノ為、吾レノ為、亦タ亡キ母ノ廻向ノ為、愛（イト）シキ君ノ菩提ヲ弔フ為。題目、、、

朝夕ニ、吾ガムネニ思フハ亡キ母ノオモカゲ。ハジメテ宮仕ヘ致セル時、太子ノ君ニアヒ其ノ嬉シサヲムネニヒメ、悲シキ時ハ心ナホシ、吾レ一心ニ題目ノ供養トナヘ申サン。題目、、、

母上、姫ハ少シモ母ヲウラミ申サズ、斯クナル事モ前（サキ）ノ世ヨリノ約束。姫ハ此ノ正法妙法トナヘサセラレル事ノ嬉シサ、母上オワカリニナリマシタカ。一日モ早クトケ合ツテ楽シク日日ヲオクル日ノ来ルノヲ姫ハ待ツテヲリマス。其ノ為ニハ姫ハタトヘドノヤウニナロウトモ少シモ厭ヒ申シマセヌ程ニ、一日モ早ク罪障消滅シテ姫ノ側ヘ来テ候ヘ。姫ハコウナル日ヲ楽シミニシテ待ツテ居リマス。八百萬余ノ神等吾身ヲ守ラセ玉ヘ。姫、厚ク御礼申シ上ゲ奉ル。マシテ（両手ヲツキ）、奇稲田姫命ノミ情（ナサケ）ニヨリコノ世ハ太子ノモトニハベリ候。コノ厚イオン情、姫イツイツノ世マデモ忘レ候ハジ、厚クオン礼申シタテマツル。

オ耳ザハリノコトデオン前ケガシ奉リオン詫ビ申上ゲ奉ル。オイトマチョウザイ仕ル」

註釈

①陵墓ノ確定ハアンズル事ナカレ

少し前にもどって、『おおやまと』令和２年９月号に掲載した「神通力如是第九回」の中で、昭和16年11月10日の奇稲田姫の神語りとして陵墓の確定についてこのように述べている。

《日聖ヨ、ヨク承レ。吾レコノ世ニ於テ妙法トナヘ、シンノ正法立テル役目、亦タ殊ニ因縁ノウズモレ玉ヘル代々君、題目トナヘ、陵墓ノ確定、明ラカニセヨ。》（現代語訳：日聖よ、よく聞きなさい。あなたには現界において妙法を

唱え、真の正法を立てるお役目があります。また特に因縁によって埋もれてしまっている代々のスメラミコトの陵墓の確定を明らかにしていくお役目があります）

その時の神語りでは陵墓の確定を法主に命じているのだが、ここでは奇稲田姫が世に出る時には、過去の埋もれてしまっていたスメラミコト達も共に世に出ることになるので、陵墓の確定のことは心配しなくてもいいと語っているのである。

第九回の陵墓についての「解説」の中で詳しく述べているように、初代のスメラミコトであるニギハヤヒノミコト以降、神武天皇までの歴史上抹殺されてきたスメラミコト達や埋もれてしまっている陵墓の主を現代に復活・顕彰させようという思いは法主の悲願でもあった。

参考までに、陵墓の確定や顕彰について法主が、昭和30年12月発行の機関紙『大倭』に書かれた記事の一部を紹介しておこう。

《……「埋れる御陵墓の被葬者顕彰」の問題もいよいよ世に出すの時機が到来したようである。……法主としてこの世に生を受けた使命は、勿論正しき宗教家として人間の精神を治め現世楽土建設にあるが、反面、現界を治めるには幽界に存する姿なき人間の霊魂を鎮定しなければなるまい。幽界に在っても現界に似た人間社会（あるいは神霊社会）があって常に顕幽表裏一体の因果関係を繰り返しているのである。

幽界に於ける霊格の高き者はそれ相応の霊作用、霊能力を持っているので現人間社会に及ぼす影響も大きい。

……右のような観点に立って不明の古墳の被葬者を顕彰し決定して行くのであるが、恐らく現社会通念からすれば、特に科学者、考古学者等から見れば狂人の沙汰との冷笑を浴びることは覚悟している。けれども日聖は天賦の使命のなすがまま、この問題に関しては狂人として進みたい。それは心霊科学が社会の常識化する時代迄の辛抱である。……今の所、この被葬者の決定には母の霊能力を借りなければならない。これは一面母の使命でもある。

日聖は主に霊波によって霊界を探知して行くのであるが、母は霊界の様相が見え、会話が出来、特に古代の事物に関しては大倭神宮鎮座奇稲田姫命よりの御神示がある。》

法主の生母（矢追日妙）が奇稲田姫からの神示すを受けて古代の陵墓などを確定していく記録を、法主は昭和12年、未発表の原稿にすでに記している。そこでは石舞台古墳や今城塚古墳などいくつもの古墳について、法主の考古学研究者としての知見も交えながら興味深い指摘がなされている。

②真ノ題目唱ヘ吾レモトモニ行ヲナサン

○真の題目

中将姫伝説の中では姫は阿弥陀如来（あみだにょらい）への念仏を唱えておられるが、ここでは「南無妙法蓮華経」を真の題目と言われているのではないだろうか？

○行（ぎょう）

「真ノ題目唱ヘ吾レモトモニ行ヲナサン」と言っておられ「真ノ題目ヲトモニ唱ヘン」とはなっていない。題目を唱えることと、行を為すことはここでは別のもののようである。そこで、ここで言われる「行」とは何なのだろうか？

題目を唱えるだけでなく罪障消滅の為の日頃の行いのことである様に思える。

実は中将姫伝説の中では姫を虐げた継母は、そのことが露見すると、それを恥じ自死してしまう。つまりお互いの因縁は解消されないままなのである。

多くが孤立した存在であるという霊界の生活では、でき得ない互いの罪障消滅であるが、今世で再び母と子として転生してきた二人の日常生活の中での関係性の修復こそが罪障消滅（真のみそぎ）であると思える。

私自身（林）の経験ですが、21歳からの9年間ほどを「因縁解脱千座行」という行法を毎日一度行じていた。いくつかのお経や真言を唱える行であるが、最初はそれらをお唱えするだけで、罪障消滅できるものだと思っていたが、途中からこの行をベースにして日常に起こる様々な出来事や、出会う多くの人々との関係性の中で己の罪障に気付き、それを日常の中で乗り越えていく行だと分かってきた。

結果、私は到底私の罪障を消滅できたとは言えないが、様々な幸運なものごとやありがたい人々（敵対する人や仲間となる人）との出会いの中で、少しは前に進めたように思う。無論法主との出会いは、その幸運の最たるものであるが。

③黄泉（ヨミ）

（ヤミ(闇)の転か。ヤマ(山)の転ともいう）死後、魂が行くという所。死者が住むと信じられた国。よみのくに。よもつくに。こうせん。冥土。九泉。　（岩波書店『広辞苑』より）

死後、その魂が行くとされている地下のせかい。冥土。泉下。よみのくに。よもつくに。

（小学館『大辞泉』より）

この二つの辞典の説明に共通して感じられるのは、法主が説かれている「顕幽不二」という

生と死の相関関係が説明されていないところである。

この神通力如是は、この相関関係があっての物語である。

今回の原文に「黄泉国ニ居マセル母上、ナニトド母（継母）ヲスクイ玉ヘ」とあるが、これは中将姫が霊界にいる生母に、罪のある継母の救いを求めていることになる。つまり高位にある霊界人としての生母の力を借りて継母の心の浄化を願っている。

黄泉の世界が地下のような所であれば、このような中将姫の発想は出てこない気がする。今回の原文の流れの中では、中将姫は現界人のような存在感であり、その生母は（黄泉）霊界人のような二人の関係になっている。

この神通力如是が記されたのは昭和16年11月からだから、この二人は共に霊界人である。今回の原文の最後の方で「八百萬余ノ神等吾身ヲ守ラセ玉ヘ」とあって、中将姫は自分のことを吾身と言われている。「吾身ヲ」（ワガミヲ）と記されている。

話をずらしますが、私（杉本）の体験では、霊界人が誰か（○○）に転生した時などに、この○○は「ワガミナリ」と言われることが時々あった。「生きている間」のことは「ミノアルウチ」とも……。これにならえば、中将姫の吾身は「妙月・スズカ」でなくてはならない。

本題にもどろう。昭和16年11月17日に現界人として存在するのは、神通力如是第二十回目（令和４年７月号）にある表「関連系図」にあるように、中将姫は「妙月・スズカ」、父・豊成「成川栄三郎」、継母・狭衣姫「成川貞」、妹・小百合姫「成川富美子」、である。

ここでは法主（太子）の妻となった妙月に憑依した中将姫が成川家の父、継母、妹、三人と共に過去世の因縁による人間ドラマの中で各人の罪障の消滅を成就せんとしている。

したがって黄泉の国とは人間にとって一方通行であってはいけないと思うのである。

現代語訳

昭和16年11月17日、　午後８時の続き

奇稲田姫「私は奇稲田姫です。

日聖よ、よくお聞きなさい。天皇（すめみま）とその親族を埋葬している陵墓の確定を明らかにしなさいと以前に申しましたが、そのことについては心配することはありません。私親（みずか）らが申します。安心しなさい。（長い間世に隠れていた）私が世に出る時、共に忘れられていた（神武以前の大倭歴代の）天皇（すめらみこと）の方々と一緒に世の中に出てきます。安心しなさい。心配することはありません。倭姫、日々ご苦労をかけます」

倭姫「つたない技量で日々奇稲田姫様の御前を汚していますのに、有難い御言葉、ありがたく承ります。失礼させていただきます」

中将姫「私は中将姫です。八百万余の神々、私の罪を取り払い下さい。母の犯しました罪、どうぞお許し下さい（礼）。母の罪は私が居ればこそで、母の罪は私の罪でもあります。（母子）共に題目をお唱えし、共に罪障をぬぐい取っていきましょう。

お母様、聞こえましたか？　お母様一日でも早く罪障消滅が出来たならば、私達は幸せになるのですから、真の題目を唱え、私も行をおこないます。お母様、聞こえないのですか？　お父様、あなたも共に罪のある身なのですよ。ご一緒に題目を唱え罪障消滅をなさって下さい。妹よ、あなたも私達と同様です。共に罪障消滅をなさい。

霊界におられる（生みの）お母様、どうぞ継母（はは）をお救い下さい。私を不憫であるとお思いならば継母の心をお直し下さい。私は題目を唱えます。継母の為に、父の為に、妹の為に、私の為に、また亡くなられた（生みの）母の廻向の為に、愛しい君（聖徳太子）の菩提を弔う為に、題目、、、。

朝な夕なに私の胸に去来するのは亡くなった実母の面影です。また、初めて太子の許婚となって宮中に出仕いたしました折、（聖徳）太子様にお会いたしました。その嬉しさを胸に秘めて、悲しい時には（恨みに乱れた）心を正し、私は一心に題目の供養をこのお二人の為にお唱えいたします。題目、、、。

お母様、私は少しも母をお恨みいたしません。こうなることも前世からの因縁です。私はこの正法である妙法をお唱えできることを嬉しく思っています。お母様お分かりになりましたか？　一日でも早く（母上と）分かりあい、心が通じ合って楽しく日々を送る日の来ることを私は待っています。そのことの為には私は（今、この現界で）たとえどの様な目に遭おうとも少しも厭（いと）いはいたしませんから、一日も早く罪障消滅をして私の側へ来て下さい。私はそのようになる日を楽しみに待っています。八百万余の神々、（今、現界に転生しているスズカである）私の身を（この世での母子の罪障消滅の為に）お守り下さい。奇稲田姫様、厚く御礼を申し上げます。何よりも、奇稲田姫様の御情（みなさけ）によって今の世では太子（日聖）のお側におられるのです。この御恩情は、私はいついつの世まで忘れはいたしません。厚く御礼を申し上げます。

お耳障りのことで御前（おんまえ）を汚し、お詫び申し上げます。失礼させていただきます。

あじさい日誌

10月8日　午前10時から大倭町自治会役員会。午前11時から大倭町自治会会員による避難訓練及びレクリエーションが大倭会館前で行われました。

10月15日　大倭神宮月次祭。

午後、「むすびの家」コンサートとして、好天の下、交流の家で小野文生同志社大教授のお話と中川五郎さんのライブ等がありました。

10月23日　大倭大本宮月次祭。

この日の法話は昭和40年10月23日月次祭より、令和元年10月号『おおやまと』に「既成宗教を立て直す柱としてのお役目」として掲載分でした。

10月29～31日　大倭会第347回秋の文化行事で佐渡へ。次月号に報告記事の予定。

11月3日　大倭の奥津斎庭・金剛大龍王さんの寝床用という新藁が到着しました。

11月6日　大倭神宮月次祭。

午前9時から大倭墓地の定例大掃除でした。

午後6時半、大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では

10月13日　奈良市の実地指導監査。ここ数年は書面監査でしたが、久しぶりに担当者が来苑。

法人運動場を地域に開放しています。隣接の菅野台自治会の子供達の夏祭りや、毎週水・金曜のグランドゴルフ、ペタンクの大会等に利用されています。

（菅原園）

10月10日（通所）　秋祭りで割りばし鉄砲の射的やヨーヨー釣り等。職員もハッピを着て雰囲気作りをしました。

10月15日　アメリカンドックを、目の前で揚げるというおやつ作りを実施しました。

（須加宮寮）

10月9日　奈良県心身障害者作品展のために作品作り。

10月18日　皆一緒に参加してグラウンド清掃をしました。

（長曽根寮）

10月17日　コロナ禍で長らくできなかった散髪を、美容師さん3名と誘導職員の頑張りにより朝早くから1日でほぼ全員行えました。

（茂毛蕗園）

10月31日　ハロウィンで魔女・猫娘・怪人に仮装した職員が、おやつを手渡しました。

（八重垣園）

10月よりラジオ体操を再開しました。

表紙写真によせて

林　修三

コロナの影響でここしばらく延期になっていた「大倭会文化行事」。その替わりというのもおこがましいが、私と高橋良美さんのコンビでこの二年間、ささやかなミニ文化行事を続けている。そんな折、フト立ち寄った崇神天皇山辺道勾岡上陵。その静謐なたたずまいに何かヒシと胸にせまるものを感じた。

崇神天皇といえば、『日本書紀』に宮中の殿内にお祀りされていた天照大神と倭大国魂神の二神を、国内情勢不安のため一緒に祀るのをやめ、天照大神を皇女の豊鋤入姫に託し、倭の笠縫邑に祀らし（後に、豊鋤入姫から第十一代垂仁天皇の皇女の倭姫に託される）、倭大国魂神は、同じく皇女の淳名城入姫につけて祀らせたとの事で、何やら大倭とも因縁の深さを感じる。

陵は奈良県天理市柳本町の山辺の道にある。冬の一日、山辺の道散策の折に一度たずねられるのは如何でしょう。

日聖祭ご案内　令和4年12月23日(金)

大倭七十九年　元旦

法主日聖師の御誕生を記念する祭典

○午前10時、法主様の奥津城に参拝。

午前10時30分より大倭大本宮拝殿において日聖祭がとり行われます。

お願い　今になってもコロナの勢いは予断を許しません。「3密」を避けるべく、引き続き、皆様のご協力をどうぞよろしくお願い致します。

●恒例の直会演芸会は、今年も中止とさせて頂くこととなりました。

（演芸会担当・中島武宣）

あんない

＊金鶏祭（大倭神宮）

12月4日(日)　午後2時より大倭神宮にて。

金鶏祭とは、高千穂勢に対し鳥見側が正に勝鬨を上げんとした時、天に出た光を天啓と悟り矛を収め講和した、「大和」の精神を記念するお祭です。

『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流―長曽根邑のすめらみこと」等を読んだり、聖歌「くにのもと」を歌う時、改めて〝和の光〟に思いを致しましょう。

＊月次祭（大倭神宮）

12月6日(火)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催禊会

12月11日(日)　午前9時より「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。昼食は用意されます。

これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

＊月次祭（大倭神宮）

12月15日(木)　午後2時より大倭神宮にて。

＊日聖祭（大本宮拝殿）

12月23日(金)　大倭元旦。

上の「ご案内」をご覧下さい。

＊大倭神宮境内・周辺大掃除

12月25日(日)　午前9時より。有志の皆さんはご参加下さい。昼食は用意されます。